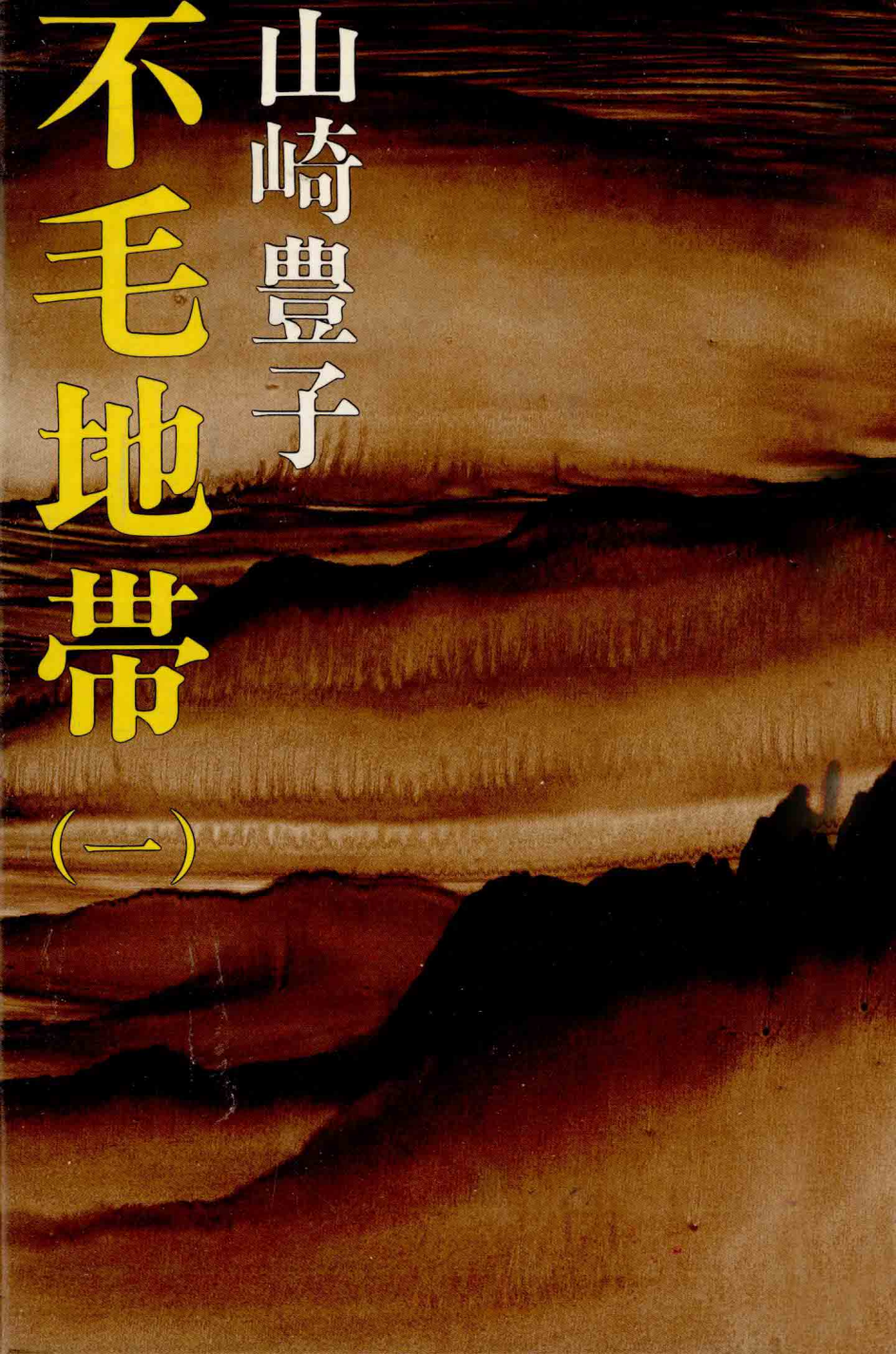


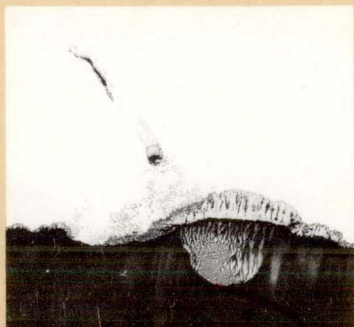
山崎豐子

不毛地帶

(一)



不毛地帯
(一)



新潮社

不毛地帯(一)

昭和五十一年六月二十五日 発行
昭和五十一年八月二十日 六刷

定価 九七〇円

著者 山崎 豊子

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話(業務部)〇三二六六五一一
(編集部)〇三二六六五四一一
振替 東京 四一八〇八番

印刷 二光印刷株式会社
製本 新宿加藤製本

© 1976 Toyoko Yamazaki Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信保宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

不毛地帯(一)・目次

一章	出 会 い……………	7
二章	壊 滅……………	14
三章	社 長 室……………	33
四章	シ ベ リ ア……………	40
五章	運 命……………	70
六章	濁 流……………	102
七章	戦 犯……………	131

八章	地の果て……………	155
九章	門出……………	174
十章	祖国へ……………	181
十一章	再出発……………	202
十二章	春雷……………	240
十三章	アメリカ……………	288

裝
幀
司
修

不毛地帶
(一)

これは架空の物語である。過去、あるいは現在において、たまたま実在する人物、出来事と類似していても、それは偶然に過ぎない。

一章 出 会 い

社長室の窓の外に大阪城が見え、眼下に帯のような堂島川が見える。

近畿商事の社長である大門一三は、朝、出社すると、窓寄りの机に坐り、大阪城を視野におさめる。冴えた冬陽の中で、天守閣の甍と塗籠の白壁がくつきりと空に聳えている。大門一三にとって、城は覇者の館であり、戦を連想させ、商社の日々の烈しい闘争心が鼓舞される。次に社長室の壁面一杯に拡がった近畿商事の海外支店網に視線を移す。銅板で造った世界地図の上に、各地に所在する海外支店が赤ランプで、出張所が青ランプで標示され、経度の左右に現地時間が記されている。西半球は眠りに入っているが、東半球の各地では、今三百人の駐在員がテレックスと闘い、或いは飛行機で空を飛んでいる。それを思うと、大門の眼に強い活気が漲って来る。

身長一六七センチ、体重七十五キロ、胸囲一メートル、桜色の艶々しい顔に金縁眼鏡をかけ、太い手首にオーディマ・ピケの時計を巻いた姿は、到底、五十六歳には見えな

い逞しさがある。

机の上には、早くも社長決裁の書類と社長必見の報告書が積まれている。大門はまず国際相場表を手にとった。ニューヨークの棉花、シカゴの小麦、シドニーの羊毛、シンガポールのゴム、ロンドンの砂糖など、各国取引所における一日の始値と終値がドル、ポンド建てで、びっしり書き込まれている。大門はどんなに多忙を極めていても、必ず主要国際商品の相場には眼を通す。

大門一三の唇がたちまち不機嫌に曲り、太い手がインターフォンに伸びた。

「羊毛部の色川部長を呼んでくれ、忙しいから、電話でいい」

秘書に命じた。

「社長、色川でございます」

緊張した声で、すぐ応答があった。

「オーストラリアの羊毛が、えろう急騰してるやないか、原因は何や？」

苛だつと大阪弁になる大門は、直截に聞いた。半月ほど前までは、一ポンド六十ペンス前後で、ほぼ安定していた値が、七十ペンスをじりじりと突破したと思う間もなく、今日は八十四ペンスに撥ね上っている。

「業界筋では、ヨーロッパ、アメリカでの需要がファッションの変化に伴い、急増したという説、オーストラリアのクイーンズランド地方一帯の早魃で牧草が枯れ、羊が大量

に死んだためという説など、いろいろ流れています。ただはっきりした原因はつかめておりません。しかし羊毛部としましては、既に二十日ほど前から、異常な値動きに気が付いておりましたので、シドニー支店と密接な情報交換をしながら、連日、買いに廻り、今週半ばまでに、来年三月分までの先物買いを入れました」

色川羊毛部長は、てきばきと報告した。

「それで、この先の見通しはどうなんや」

「この相場は九十ペンスを抜けることはないと思いますので、三割方がのったこのあたりで一まず利喰って、鍋入れしようと考えておりますが——」

第一線の部長らしい敏捷さで、これまでの儲けはがっちり掌中に入れ、この先は逃げの線を打ち出すと、

「ノウ！ この相場は二百ペンスまで必ず行く、それまでは目をつぶって買いまくるのや！」

「二百ペンス、しかしそれほどの根拠はまだ……」

「しかし何も何もない、クイーンズランドの牧草が枯れたら、その南のニューサウスウェールズ地方も旱魃になる公算は大や、そうなったらオーストラリアの羊毛は底をつく、二百ペンスまでは買いや！」

羊毛部長の躊躇いを無視し、大門一三は、一方的に喋りまくり、がちゃんと電話をきった。

大門には、強い自信があった。

近畿商事は、今でこそ資本金三十九億、従業員三千人の

総合商社として、日本の十大商社の上位を占めているが、もともと船場の織維問屋から発祥した商社で、昭和三十三年の現在も取扱いの六割は、織維で占められている。

大門一三は、大正十一年、大阪高商を卒業して近畿商事に入社後、日ならずして北京支店長に拔擢され、棉花の輸入買付けに中国大陸を東奔西走したのを皮切りに、百戦錬磨の紡績、機屋相手に血の小便の出るような激甚な商売の中をぐりぬけ、二年前に急死した前社長とともに、今日の大商社の礎を築いたのだった。社長就任後二年を経ずして、社内に大門の威令が行われているのは、相場に対する大門の卓抜した勘の鋭さとともに、剛気果断な性格によるものであった。

その大門にも、気にかかることがあった。終戦と同時に解体された旧財閥系の商社が、最近、合同し、再び曾ての財閥商社として息をふき返して来つつあることだった。それに對抗するには、今までのように各営業部門の尻を叩き、どんなにノルマを課してみたところで、おのずと限界がある。目下の近畿商事に必要なことは、旧財閥系商社に對抗し得る組織力を備えることであった。それには大局的にものごとを判断し、企業を組織的に動かす人材が必要であった。

秘書が、書類を抱えて入って来た。

「社長、十一時に綿業クラブの会合がございますので、それまでに書類の決裁をおすませ戴きたいのでございます

が——」

年末に向つて、ただでさえ多忙なスケジュールがさらに多忙になり、自邸へ持ち帰らねば処理しきれぬ日も少なくなつた。

「うむ、急いで片付けてしまふ」

大門は頷きながら、机の上に積み重ねられた書類の一番上に眼を遣つた。防衛庁への戦關機納入に関する決裁書類であつた。大門は、ふと思いついたように、

「例の壹岐正という人物の面接は、今日だったな」

「はい、十時半の予定でございます、あと四、五十分後に——」

「よし、わかつた」

大門は頷き、金縁眼鏡をはずし、眼を据えるように書類を読み、迅速に決裁して行つた。たちまち可決七、却下三、さし戻し二と決裁を終え、秘書に渡すと、机の引出しから今日、面接する壹岐正の履歴書を取り出した。

現住所 大阪市住吉区北島町四五

市営大和川住宅四九〇号

本籍 山形県鮎川郡遊佐町 蔵岡杉沢

大正元年十一月二十一日生

経歴

大正十五年四月 東京陸軍幼年学校入学

昭和八年 七月 陸軍士官学校卒業

同 十月 陸軍歩兵少尉

同十四年十一月 陸軍大学校卒業

同 第五師団参謀

同十五年 六月 第五軍参謀（満州・東部）

同 十二月 大本営陸軍部作戦課参謀

同十九年 二月 関東軍参謀

同二十年 三月 陸軍中佐

同 四月 大本営陸軍部作戦課参謀

同 八月 大本営特使として関東軍へ派遣され、終戦と同時にノ連抑留

同三十一年十二月 抑留解除帰還、現在に至る

職業 無職

履歴というより軍歴以外の何ものでもなかつた。大門は視線を離れた。そしてそこに添えられている写真を見た。すぐわなない感じの背広を着た四十六歳の男の顔が映っている。シベリアの苛酷な抑留生活を物語るように、頬の肉が削げ落ち、眼の下に窪みが出来ていたが、秀でた額の下の眼は、やや憂いを帯びているが、澄んだ光を湛えている。シベリア抑留十一年の忍苦も、この男の瞳の光だけは奪えなかつたようであつた。

写真をおくと、大門は履歴書に添えられているもう一通の封書を広げた。それは壹岐正から大門に宛てた私信であつた。和紙に墨筆で簡潔な文面がしたためられている。

御願之儀

一、小生を面接、首実検の後、不採用という恥辱は御容赦願いたし

一、シベリア抑留十一年間、言論行動の自由を奪われた小生故、暫し言動の自由を束縛しないよう御願ひ致したし

一、算盤そろばん簿記はもとより、商業知識は皆無にして且つ、不向きなること御諒承願いたし

大門の口もとに苦笑が洩れた。この男を採用すべく、半年前から再々、使いの者をさし向けたにもかかわらず、その度に、鄭重に辞退し続けられたのだった。そうした大門に対し、近畿商事の役員たちは、元大本営参謀の採用に疑問を持っていた。戦後の一時期、旧軍の司令官や参謀クラスを意識的に集め、その人物のコネや顔を巧みに利用した企業があったのは事実だったが、戦後十三年経っている今日、近畿商事のように生っ粋まことの大阪発祥の商社が、よりもよってシベリア帰りの旧軍人などを採用しなくてもいいのが、役員たちの意見であった。しかし、大門は旧軍人のコネや顔などあてにしていない。それより彼らの作戦力と組織力に魅力を感じているのだった。民間企業の中でその力量をどれだけ発揮できるか解らなかつたが、曾て国家の総力を傾けて養成し、今の貨幣価値に換算すれば、一人

數千万の国費をかけた参謀クラスの中から、優れた人材を選び出すのは、最も合理的で、確率の高い方法だというのが、大門の考え方であり、使えるか、使えないかは、首実検の上決めればよいことだと思つていた。

しかし、三度目によりやく履歴書を提出し、面接の運びになつても、なお且つ三箇条の「御願之儀」を書き添えて来る壹岐正という人物に対して、大門は強い興味を覚えた。自分の考えている先を越して、面接、首実検の後、不採用という恥辱は御容赦願ひたい——、それは傲岸不遜ごうあんぶそんと云おうか、心の位取りこころのゐどりの峻厳げんげんさと云おうか、いずれにしても、大門ははじめて、人の訪れを待つ氣になつた。

壹岐正は、身装みなりを整えると、六疊と四疊半二間と台所だけの手狭な家の戸締りをした。大阪・大和川の堤の南側に建っている市営大和川住宅は、三百戸余りの質素な建物であつたが、家々のささやかな庭木が眼を潤した。玄関の戸に鍵をかけ、手製の郵便受けの中に鍵を入れて、家を出た。洗濯ものを干している近所の主婦たちの視線が集つたが、この頃ではもう慣れてしまつてゐる。壹岐は目礼して、主婦たちの前を通り過ぎ、南海電車の住之江駅すみのえへ向つた。ソ連からの最後の引揚船で舞鶴へ帰還し、妻子が居る現在の住いに帰つて来て二年経つてゐるが、壹岐はまだ浪人暮らしをしてゐるのだった。元大本営参謀というだけで、何の履

歴も持たない壹岐は、大阪府庁の民生部世話課に勤めてゐる妻の報酬で生活していた。朝、妻と高校生の娘と中学生の息子を送り出し、家の中の掃除とその日の買い出しをした後、毎日のように旧部下の就職を頼み歩くのが、壹岐の日課であったが、今日は、はじめて自分の就職のために近畿商事へ出かけて行くのだった。

九時を過ぎた電車の中はすいており、腰をおろしたが、重い気持であった。心の中では、まだ近畿商事への就職が決まっていなかった。近畿商事からの再三の入社の誘いを思い、三度目には大門社長じきじきの使いがさし向けられたことを考えると、無下にも断りかね、やっと履歴書に、自分なりの所信を添えて郵送したのだが、シベリア抑留十一年間の空白を持つ自分が、時代の変転が激しい民間会社、特に商事会社などに勤まるだろうかという不安があった。しかも、旧軍人に対する世間の白い眼がまだ根強く張っていることを考えると、なぜ一面識もない大門一三が、自分を求めるのか、不審であった。もし、自分が曾て大本営参謀であったことを何らかの形で利用しようと考えているのなら、背じられなかった。一年前にも、東京の防衛庁から強い勧誘があったが、壹岐は、生活の資のために軍務に携りたくないと思つたのだ。それだけにいかなる形でも、曾て旧軍参謀であったこととかかわりのない場での話でありたかつた。壹岐にとつて、大本営作戦参謀として、大東亜戦争に参画したことが、余人には到底、理解さ

れ得ぬ心の負い目になつてゐる。

難波駅でバスに乗りかえると、終戦十四年目の正月を迎える師走の街は、人々が慌しげに歩き、物資が溢れ、戦争の痛手が窺えないほどの活気が満ちていたが、壹岐とその周囲の者たちは、まだ敗戦の辛苦からたち上れずにいる。壹岐はオーバーのポケットに手を入れ、ポケットの底にある封筒に触れた。壹岐が就職の世話をした旧部下から郵送されて来た現金封筒で、「中佐殿、僅かですが、ご家族で焼ききなりともして下さい」という手紙が同封されていた。はじめて手にしたポナナスの中からの送金であった。あいつ奴！ 壹岐は、部下の顔を思ひうかべ、優しく笑つた。

堺筋の高麗橋で降りると、交叉点の角から新しい近畿商事のビルが見えた。

壹岐は、正面玄関のガラス扉を押し、人の出入りの多さとその服装の派手さに戸惑つたが、受付で名乗ると、すぐ七階の秘書室へ案内され、待つ間もなく社長室へ通された。扉を開くと、窓寄りに大きな執務机があり、そこから大門一三が見据えるようにまっすぐ壹岐を見た。壹岐も、静かな澄んだ眼ざしで大門を見た。暫時、沈黙が続く、大門の大きな声が響いた。

「壹岐さん、あなたの所信はなかなかユニークでしたよ」

と云い、椅子をすすると、

「不躰な申し上げようになりました、どうも無骨なもの

で——」

壹岐は、ややほにかむように云った。

「いや、りっぱですよ、シベリア抑留十一年間の辛苦をなめながら且つ、これほどの気骨を失わないのは——、帰国してからまる二年、どこへも就職しないのはどういいうわけですか」

「最後の興安丸で一緒に帰りました部下たちの就職口を見つけることと、弱っていた私自身の体を回復させることに、かかってしまいました」

「それにしても、まる二年もの浪人生活をやり遂げるには、あなた自身が何か心に期している第二の人生があるんじゃないですか」

大門は、確めるように聞いた。

「別に——ただ、次の第二の人生だけは誤りたくない、いや絶対、誤ってはならぬとそう考えているものですから、つい……」

壹岐の口数は少なかった。

「それで、当社への就職は決心してくれましたか、あなたの三条件は呑みますよ」

「恐縮です、しかし正直なところ、私はなお且つ、迷っています」

と躊躇うと、大門は体乗り出し、

「それは、商売が解らないのに商社へ入ることと、曾てのあなたの肩書が商売上に利用されないかという危懼(きく)でしょ

うな、だが、その点については、はつきり答えましよう、私があなたに望むことは、曾ての大本営作戦参謀としての作戦力と組織力を、当社に生かして貰いたいということですよ」

大門の眼に熱気が帯び、精悍(せいがん)に光った。

「しかし、軍隊と民間企業とは、根本的に違うものですか——」

「違(ちが)うかねえ？ 私はむしろ根本において軍と商社は同じやと思う、私流に遠慮なく云わせて貰うなら、軍隊はもともと元手(もとて)なしに一銭五厘の葉書で兵隊を集めて来るどころ、商社もありていに云えば、人と電話だけで動いているところ、両方とも元手なしで、要は人と頭の使い方一つで、浮きも沈みもする点が、よう似てるやないですか」

と云うなり、大門はあつはつと咽喉(のどぼとけ)仏を鳴らして、豪快に笑い飛ばした。それは壹岐が曾て仕えた野戦の司令官と共通する剛気果断な人となりであった。参謀として育つて来た壹岐は、そうした司令官型の人間としか組めない自分の体質を知っており、大門と自分との出会いに、或る運命的なものを感じた。

「どうですか、来て戴きますかね」

壹岐は、瞬時、沈思し、

「お世話になります」

一言、そう云い、きちんと一礼した。旧軍人らしい威儀の正しさがあつた。大門の顔が大きく綻(ほころ)んだ。

「やつと私の望みが叶いましたな、ところでシベリアは、どちらで抑留されていたんです？」

「ハバロフスク、タイセット、マガダンの北のラゾなど転転としました」

大門は、壹岐が口にした地名を壁面の世界地図の上で追った。

「それにしても十一年間とは長かったですな、その間一番辛かったことは、やはり飢えですか」

「いや、飢えよりも、独房の孤独です」

「ほう、独房——、捕虜収容所だけでなく、牢獄へも入れられてたんですか」

「戦犯として、重労働二十五年の刑を受けました」

「それは、大本営参謀だったということですか」

「向うの表現では、資本主義帮助罪という罪名でした」

「ほう、資本主義国家の人間に対し、資本主義帮助罪を適用するのですかねえ」

大門は強い関心を示したが、壹岐は、せっかく癒えかけた心の傷を、鋭利なメスで裂かれるような痛みを覚えた。

シベリア十一年の抑留生活は、人間として見てはならぬもの、してはならぬこともしてしまつた地獄の生活であつた。それだけに、一日も早く心の中から拭い去ってしまいたいことであつた。それが大門の問いかけによって、創口が開き、どくどくと血を噴き出した。

不意にガラス窓を通して、鈍い震動音が伝つて来た。見

上げると、旅客機であつたが、壹岐の耳には爆撃機の轟音に聞え、壹岐を十三年前に引き戻してしまつた。

二章 壞 滅

東京、市ヶ谷の大本營で、陸軍中佐壹岐正は、阿南陸相自決の報せを聞き、疑然とたち嫉んでゐた。玉音放送が行われた昭和二十年八月十五日の夕刻のことであつた。

終戦の詔勅を聴いて茫然自失、なすことを知らぬ將兵に、「今晚、阿南陸相自刃す」の報せは、打ちのめされるような大きな衝撃であつた。阿南陸相は、昨十四日、宮中防空壕で行われた最後の御前會議においても、無条件降伏に反対し、本土決戦後和平の説を強硬に主張したが、一度、終戦の聖断が下るや、深く聖旨に従い、払暁「一死ヲ以テ大罪ヲ謝シ奉ル」という遺書をしたため、割腹自刃を遂げたのだつた。阿南陸相の武人らしい最期が、大本營作戦参謀である壹岐の胸に迫つて来た。

「中佐殿、参謀総長がお呼びであります」

下士官が伝えて来た。壹岐は、呼び覚まされたように、作戰室と同じ二階にある斜め奥の参謀総長室へ足を向けた。

固く閉された扉を押すと、梅津参謀総長は正面の机に向つてゐた。端正な顔に苦惱と濃い憔悴が滲み出ている。阿南陸相とともに最後まで決戦後和平を主張した梅津参謀総長にとって、陸相の自刃は、壹岐たちの推量を越えるもの

があるに違いない。

壹岐が机の前にたつと、参謀総長は静かだが、瞬きもせぬ視線で壹岐を見、

「重大な任務の遂行を命じる、明朝、新京へ飛んで、関東軍司令部に聖旨のあるところを伝えて貰いたい」

と命令した。壹岐の眼前に、敗戦によるもう一つの苛酷な現実が迫つた。玉音放送後も大本營には、南方、支那、満州にある各軍司令部から、停戦に至つた経緯とその信憑性を亂す電信電話が殺到し、ことに満州にある関東軍七十万の將兵は、いかに玉音放送による聖旨といえども、俄かに刷い難し、ソ連の参戦はもとより予期せしところであり、全軍玉碎を賭し、死中活を求むべしと、云つて来ているのだつた。

梅津参謀総長は、言葉を継いだ。

「関東軍に対しては、もはや電信電話による説得、慰撫は不可能である、君が行つて直接、聖旨のあるところ、そして大本營命令として関東軍司令部に伝えてくれ、君なら四カ月前まで関東軍の参謀であつたから、大本營特使であると同時に、もと同僚として説得できるだらう」

壹岐は、つい四カ月前、本土決戦の作戦要員として、関東軍から大本營参謀本部へ呼び返されたばかりであつた。それだけに関東軍が対ソ作戦のために心血を注ぎ、南方への兵力補強のため、兵員と弾薬を削減されても微動だにせず、七日前、突如、参戦し、満州へ侵攻してきたソ軍と戦